

又兵衛風源氏絵諸作品の検討

廣海 伸彦(出光美術館)

岩佐又兵衛が制作にたずさわった源氏絵を題材に、その場面選択の傾向、および絵画様式について考察することが、この発表の目的である。

まず、又兵衛とその工房の関与が推測される源氏絵およそ 30 件を、画面の形式にもとづいて分類することからはじめる。かつて、田口榮一氏が、屏風形式の源氏絵をめぐって4つの類型のモデルを提唱したように、ここでも又兵衛の源氏絵を画面の形式によって分類したあと、様式面での比較検討をおこなう。その結果、ひとつの画面にひとつの場面をとらえた作例に初発的な性格が認められることを述べ、これを議論の前提としたい。

その上で、場面抄出の方法を話題にする。福井の商家に伝来した押絵貼屏風、いわゆる金谷屏風のうち、「官女観菊図」(山種美術館)の主題について、六条御息所母娘の姿を描いていることが近年ようやく明らかにされたように(飯島沙耶子「岩佐又兵衛筆 官女観菊図」、『國華』第 1360 号、2009 年)、又兵衛には既存の源氏絵の表現からいちじるしく逸脱するあまりに、多くの研究者を惑わせ、真の主題を見誤らせてきた作品がいくつか存在する。ながらく「蟻通・貨狹造船図屏風」という作品名称が与えられてきた一双屏風(出光美術館)も、そのひとつといえる。向かって左隻の情景は、紀貫之にまつわる故事ではなく、『源氏物語』の桐壺巻の一場面とみるのが適当だろう(拙稿「岩佐又兵衛の源氏絵に関する試論」、『出光美術館研究紀要』第 20 号、2015 年)。そのことを再度指摘した上で、又兵衛がもちいた特異な場面抄出の手法を抽出したい。

次に、又兵衛の当世と古典の接点について試論を提示する。旧金谷屏風の「源氏物語 花宴図」(所在不明)に象徴されるように、又兵衛が創出したと考えられる源氏絵の図様のいくつかは、17 世紀中期以降、菱川師宣などが挿絵の版下を手がけた梗概書へと継承された。このことに関連し、新奇な時様風俗画を手がけ、一部に浮世絵の開祖と呼ばれながらも、源氏絵をはじめとする古典画題の絵画に旺盛な筆をふるった、ふたつの又兵衛像の接点——すなわち、現代と古典とが切り結んだ地点に、この絵師の先鋭的な表現の起点を求めたい。たとえば、「源氏物語 総角図屏風」(細見美術館)。薫と匂宮が乗る紅葉見の舟と、中の君などがいる八の宮の山荘とが、画面の対角線上に布置される。その場面自体は、該当巻の絵画化の歴史において、比較的目に親しいものといえる。ただし、又兵衛の関心は、当世的な方向へと大きく振れている。女性たちがいる室内は、多くの総角図のように御簾を介して屋外と接しているのではなく、堅牢な連子窓によって隔てられる。女性が増員されることも加えるならば、いわゆる舟木本「洛中洛外図屏風」(東京国立博物館)などに活写された六条三筋町の光景を想起させる描写といえる。当世と古典の境界を曖昧にみせる源氏絵に焦点を合わせつつ、又兵衛研究の現況と課題について指摘したい。